

平成二十一年二月一日発行 第十九卷第 二号 (毎月一回一日発行)
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐

かい

岡井省二創刊

平成 21 年 2 月号



紅葉山

高橋将夫

どうみても吾にむかつて木の实降る
鈴虫の鈴か夜露の散る音か
風穴に吸ひ込まれゆく秋日かな
天の川澄まず濁らず流れをる

通草の根深く静かに伸びてをる
秋の水業を解かして流れけり
冬瓜ごろりふくよかな膝の上
○×で答へ爽やかなりしかな
吾の行く道の先々バツタ飛ぶ
爽やかな緊張感の密寺かな
紅葉せぬ木々も含めて紅葉山

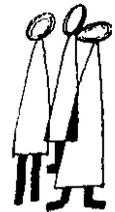
槐安集

水野恒彦

冬帝の声べうべうと嶺々に
梟や文芸の血を搾りたく
冬ざれに男はひとり澄みて立つ
つひに何かを捨てなむと冬山へ
見えて来る晩年石落のうす明り

延広禎一

太白や朱纒しづかに熟れはじめ
なにはさておつとつとつと新走
祝「白猪」上梓三句
月白を啣へ善知鳥の帰巢かな
伊吹嶺の笠雲佛ふ白猪よ
篠の道轍に満つる秋気かな



加藤みき

鰯起し無言の頬のゆるびたる
裸木になりて主を迎へたり
寒晴や象谷深くさまようて
いつの間にか連れだちてをり冬の山
夜の青空焼芋売りのこゑと笛

石脇みはる

篁を風渡るなり三十三才
みせばやの咲いて省二の句碑訪はむ
蓮の骨たかくかかげし志
千佛の殿りに居る裘
小雪や石庭に坐し足るを知る

中島陽華

狐鳴き天ぷら山と揚げてをり
天眼鏡拭く八卦見の小春かな
細男せいのうのしかと受け止め朱變かな
幣の如切干大根山の家
裸木の瘤は堪忍ぶくろかな

栗栖恵通子

胛かひがねや忘れ潮ある十一月
糸口のほつるる冬の立ちにけり
常滑の蓋吹きあぐる十夜粥
極月のうすき瞼を持ち歩く
むらさきに山眠りをり胡蝶楽

竹内悦子

箱根の関
この秋の関所破りはをらぬなり
秋夕焼西も東も浄土かな
注射針に血を盗まるる鶏頭花
ダーウインの進化論柿熟しをり
関雪の「玄猿」見たるくわりんの実

大島翠木

大露の青空母の忌なりけり
摩耶夫人亡母は尾花のさゆれなり
呵呵大笑の石榴鳥獸戯画の前
みづうみの水の音なり十二月
玄冬や三島由紀夫の金閣寺

「玄猿」||昭和八年帝展に出品の作

雨村敏子

白猪の聲して神居古潭かな
炬火のやがてしづかに月昇る
紅葉山通り抜けたるぬた場かな
一筆啓上机の辺り十二月
立冬の水に泛きたるコルク栓

小形さとる

きちかうや懸想に何の障りある
崖ふちの日溜りにしてまるめいる
赤まんま別の子細はなかりけり
朱色^あさしてわが脳天の小六月
御火焚の戻りの顔と思ひけり

本多俊子

泥葱をさげて夕日の中通る
綿虫や余生も夢の続きなる
櫛あらば天狼めざし漕ぎぬでむ
柎の花釘箱にこぼれけり
着ぶくれて見る親鸞の絵伝かな

久津見風牛

鬼女を先ず酔はせてみたき夕紅葉
夕紅葉まだ目が見えて岸あるく
夕日いま明日散る紅葉に朱を注ぐ
紅葉衣を脱ぎすて山のねむりかな
こわれゆく村に紅葉の祭りあり

近藤 きくえ

草じらみつけし男の子と木馬かな
叡山の黄金色なりぬくめ鮎
銅の幾何学模様蓮枯るる
空深く十石舟に柳散る
遠にこゑ祇園白川しぐれゐて

近藤 喜子

とこしへの言霊さがす枯野中
奮ひ立つ心の底に鷹一羽
茶の花や編棒に音あつまり来
海鳴りや大鮫鱈を核として
山々に降りくる雪の子守唄

谷村 幸子

鯨石に竹影ゆるる酔牡蠣かな
錦木や使ひなれたる花鋏
蓮如寺の皂角子すでに乾びをり
弥勒石に触れて小春の高野かな
笑尉肩を並べて蕎麦湯のむ



槐市集

寺田すず江

五郎助の魂売りし貌をして
冬ぞくから空の波動を合せぬる
威嚇する白鳥の眼の耿として
埋木舎の留守を預る石路の花
洗濯をする山姥の小春かな

富松寛子

鴉の聲記憶の連鎖はじまれり
朝風に五体よるこぶ大根引
花八手肺の隅まで息吸うて
忘れたきことのありけり毛糸編む
池の端より日の差して来し冬田かな

中 貞子



雪虫の飛んでをりけり牧はるか
たちどまる道具屋筋の師走かな
草の香の烟纏ふや冬に入る
返り花久しく逢はぬ人の家
年浅し女形なりけり月夜茸

中島昌子

芒野の波動なりけり風のいろ
芋水車覗いてゐたる顎かな
奉書紙に包まれてある珊瑚の実
人体に 関節多し 枯蓮
イヤリング落として深き草紅葉

槐集

高橋将夫選

びつしりとちびの聖者や石榴の実 奈良 瀬川 公馨

平曲に身体をゆする茸番

冬の朝百匆蠟燭消へゐたり

大鍋や食ひ逃げしたる大狸

小商人の冬至南瓜売り捌く

大枯野つぎなる夢を抱きつつ 岡崎 岩月優美子

灯の入りて人の世となる白障子

優しさの聖母に似たり返り花

貂を抱く少女ひとりが眠らせぬ

冬草や地球は生と死の舞台

団栗の秘密の基地に行き着きぬ 守口 柳川 晋

両の手に余る鯨ホツケの開きかな

水の星揺れて鯨のまぐあへる

狼あひどに 佳人カメスに 斑気あり

寒風の混沌カオスの縁えまをうろろうす

凧に飛ばされてをる秘密かな 京都 竹中 一花

竹の道続いてをりし紅葉狩

白猪祝「白猪」上梓や深空明るき神の山

神の旅雲の草鞋のすぐ消ゆる

冬帝の目鼻ゆらぎし池の面

あかあかと喜びつまる柿の秋 枚方 中野 京子

仰ぐ山顔寄りてゆく草の花

風にゆれさはればこぼる草の花

天高く願い下げなる伴なりき

色鳥やふたつに割りしチヨコレート

立冬やものみな稜となりゆける 東京 西村 純太

風花の会ひ別れては穢土に舞ふ

南京の古佛の道の初時雨

木枯や逐電したる影ひとつ

小夜時雨亡き友をるらし止り木に

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

平曲に身体をゆする茸番 瀬川 公馨
山中でひっそりと茸を守っている茸番。思わず身体をゆすりながら平曲に聞き入っている。謡っているのかもしれないが、ともかく乙な景である。平家の隠れ里といわれた里山であらうか。平家琵琶の音がこの耳にも聞こえてくるような気がする。

灯の入りて人の世となる白障子 岩月優美子
冬の寒々とした和室にポツと明かりの灯った一瞬が実に印象的に表現されている。「人の世」で闇と障子の無機質な世界に血がかよった思いがする。

狼に顎あご 佳人に斑気あり 柳川 晋
「狼の顎」に対して「クレオパトラの鼻」でも出てくるのかと思いきや「佳人に斑気」とは。月並みな「美人のむら気」も「狼の顎」に配されると生きてくる。

冬帝の目鼻ゆらぎし池の面 竹中 一花
一陣の風で池に映った冬帝の顔がゆらいだという。冬帝は冬のことでも、もとより目鼻があるわけではないが、冬の池の景がユーモラスに描かれている。

天高く願い下げなる伴なりき 中野 京子
せつかく伴をしているのに、願い下げと言われたら世話はないが、秋天に免じて、よしとしよう。

立冬やものみな稜となりゆける 西村 純太
なるほど、暖かい春はのどかで、うららかに、まろやかな雰囲気だが、寒い冬はものみな角張って、固まっているような感じがする。

決断の色は真つ赤ぞ鯡起し 近藤 公子
鯡起しに催促された決断は血の滲む思いだったのか。

松手入れ動くともなく続きをり 久保東海司
松の手入れ作業の様子がよくでている。俳句の道にもあてはまりそう。

まるめると呟いてみる安らけし 富松 寛子
「まるめろ」と一度つぶやいてみると、「安らけし」の実感がよく伝わってこよう。

天平の月光すくひし貝の匙 近藤 紀子
月光を匙で掬う感性がいい。貝の匙であるところが古風でいい。天平の月光がいい。美しい。

玄帝の高嶺に登る一歩かな 中田 禎子
厳寒に高嶺に登る一歩を踏み出す。その心意気を買いたい。精神の風景。

零余子飯大盛りにして差しむかふ 谷岡 尚美
大盛りの飯を前に差しむかう姿はなんともめでたい。零余子飯であるところがいかにも俳諧。

(以下略)